嗚呼章景君

山岸荷葉

赤ん坊の頃から知つた章景君！　否、生まれない前、彼の姉娘二人は勿論、父母ぢや人とは淺からぬ久しい馴染であつた。

『うちでな、珍らしう、赤ちやんが出來ましたんや。』

こいちやん――即ち、妹娘の政子君が、その頃嬉しさうに報告した通り、實際、その姉二人から、章景君が生まれるまで、此間十年以上相經ち候といふ、奇蹟なのである。

由來、俳優には實子が割合に少い。歴史が之を語つてゐるが、章景君は正しく中村雀右衛門丈の嫡男として、大阪天下茶屋に呱々の聲を揚げたのである。

當時亡父雀右衛門丈は、度々東上して、歌舞伎座其他の劇場へ出演し、其舞臺には實に、議る可からざる魅力があつた。ある人は、雀右丈が藝術の特技を、『癖』として首を傾けはしたが、其癖――病冠（やまひかんむり）は、いかにも感じが惡い――彼の優の藝術を、禮讃する人はまた、他の人の言ふ『癖』を、下へも措かぬほど贊めちぎつたのであつた。

彼は芝雀の時代に、明治座に上つて、朝比奈上使を演じて以來、私は知り合つたので、家族ともそれから、懇意を結んだものであつた。

『珍らしう』生まれた章景君は、さういふ傾向であるから、父君と共に、抱かれて東上した事

は始終であつたから、私の書塾に通ふお孃さん方の間にも、親交があつて――それは姉妹の両孃も同門下である爲め――劇場の茶屋又は廊下で、まゝ『抱つこ』をし、頰摺りをした事さへあつたのである。（そのお孃さんたちは、勿論今は人妻ともなり、それ〴〵兒もあるのであるが、今回の章景君の戰歿を耳にして、あの頃『抱つこ』したり、頰摺りをした章景さんが……と、彼を悼む聲が私の許へすら聞えたほどである。）

ゆくりなく病を發した亡父雀右丈、その頃松居松翁氏父子が、指壓療法の蘊奥を窮めたとあつて、其治療を受けてゐたのは、寄宿してゐる木挽町のこてふとやら言ふ家であつた。私は見舞に行くと、妹娘と妻女とが、附添うてゐて、幼兒の章景君は玩具を持つて、枕元に遊んで居たのである。雀右丈は其後大阪に於て、雁治郎丈の若狹之助で、本藏下屋敷の三千歳姫を最期に、舞臺に逝いたが、私はその後、天下茶屋の家を訪れた時、もう十歳ばかりになつて居た章景君は、遊んでゐた庭先から、聲張上げて、

『阿母ちやん、先生が來やはりましたつせ。』

と呼んだ事もあつた。

その頃の彼は、仕方のない程の腕白であつた。大阪から歸つた俳優たちの土產話には、

『やあ、驚いたのは、京家の兒のあばれ塩梅だ。手の付けられない腕白小僧だ。』

腕白小僧、あばれ息子も、大阪で高等小學を卒業して後、光陰には闕守なく成人し、六代目菊五郎丈に就て、教を受ける事になつて、彼はまた屢々私の門を潜つた。其頃は、もう昔の腕白息子でなく、却つて私の家の幼兒がもつれ寄

るのに、親しく戯れ交はす立派な青年になつたのである。

『合格しました。いよ〳〵兵士です。』

暇乞をしに來たのは、前々年の十月頃と記憶してゐるが、其後、大阪の家で、再會したのは入營前であつた。

入營前に、記念の幅物をと頼まれたので、私は逸早く執筆したのは、『忠經孝緯』の四文字である。彼はこの幅を受取つての禮狀に、この四字を服膺して忘れない事を言ひ越した。

中村章景の思ひ出

章景の戰死

藝に關する事は別として、中村章景は私が最出征後の消息も屢々聞いた。數度數回の戰に、いつも〳〵危機を逃れて、生命を全うしてゐたので、

『あんな運の善い男はありませんね。』

と、歌舞伎座の樂屋などで、語り合つてゐたものが……嗚呼、一月四日の夕の事、電話によつて章景君の訃に接した時！　恐らく、そら耳を疑つたのは、私ばかりではなかつたらうと想ふ。

巣を立ちて春秋富める子雀の
いたづらの彈丸に射落されしはも

鴻池幸武

も懇意にして居た俳優であつた。その章景の事をいふに、もう「故」とか、「であつた」とか過去に呼ばなければならぬのに淋しい哀愁を覺